



共生の時代

'09
1月

●発行:グリーンコープ共同体理事会 ●編集:共生の時代・編集部 ●〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8番36号博多ビル7階 TEL092(481)7923 FAX092(481)7876

「新しい年のはじまりに寄せて」

グリーンコープの未来に

組合員としての歩みを

重ね合わせて



グリーンコープ共同体代表理事 吉田 文子



グリーンコープ連合会長に就任した第十二期通常総会の様子

これらグリーンコープの原点は、創成期に組合員の夢を語りあい、組合員自らの言葉で起草した、中期計画基本構想「夢よかたちに」にあります。グリーンコープの20年は、その夢を紡ぎ、かたちを織り成してきた歩みだったと、改めて思います。

2009年の幕開けです。さらに元気に輝かしい一年を願い、昨年グリーンコープ設立20年という大きな節目とグリーンコープ共同体(連合)代表理事としての、私自身の5年間を振り返ってみることにします。

20周年記念キャンペーン「GREEN ACTION」は躍動感に溢れていました。全14生協がそれぞれに記念講演会やお祭りなど多彩に取り組み、グリーンコープの「ほんもの」と「願い」をアピールしました。そして次世代を担う若い層の仲間を多数迎え、グリーンコープは40万世帯の生協へと大きく豊かに成長しています。

また、20周年記念として開催した「アジア民衆福岡寄合い国際会議」は、ネグロスをはじめ、私たちが20年をかけて築いてきた関係をもとに、



2006年9月、初めてネグロスを訪問。「ネグロスとの連帯」を体験した

アジアの国の人々が初めて一堂に集結しました。お互いを尊重し、相互の恵みを交換しあうという連帯関係をより一層豊かに築き上げることを確認できた集会となりました。

グリーンコープ連合の第4代会長に、そして2007年にグリーンコープ共同体のはじまりと共にその代表理事に就任しました。振り返ってみると、その日々は14生協の代表のみならず共に、私たちの「いのち・自然・くらし」にひたむきに向きあっていた日々でした。例えば「食品偽装」に、「環境汚染」に、「戦争への兆し」に、「許せない!」と怒りました。また、人と人との関係のあり方に悩み苦しんだこともありました。目の前と将来の課題に、その都度、互いの意見の違いを納得いくまで話しあい、次への歩みをみんなで創ってききました。その検討の根っこには、常に「私はこう在りたい」という一人ひとりの「願い」があったからこそだと思っています。そのたくさんの「願い」



2007年9月、組合員として初めてパレスチナを訪れ、パレスチナの人々の痛みに触れた

この春私は、「いのち・自然・くらし」を守るグリーンコープ運動にこれからはかわりながら、これまでとは別の道へ踏み出す決意です。自らの、「不足しては悩み」「溢れては苦しむ」、そんな小さな悩みを越え、今やつと「人の責任を尊重する」「人を信じて託す」ことが自分のものとなった気がしています。

新しい道程は自分が拓き、ただ仲間と共に創る道でもあります。それが礎にあるグリーンコープの未来を次世代に託し、これからは共に歩んでいきたいと願っています。

「南と南」「南と北」の共生・連帯のさらなる深化を確認しあった(2008.11.8~9)



「南と南」「南と北」の共生・連帯のさらなる深化を確認しあった(2008.11.8~9)

Contents

グリーンコープを創った人たち(10) グリーンコープ連合 林 みな子	
私たちの社会は 農業を基礎になりたっている	2
「アジア民衆福岡寄合い」単協分散交流会 組合員と出会う 楽しく交流	3
協同して、連帯して、 グリーンコープの豊かな未来を創る	4・5
メーカー・生産者からのメッセージ(10) 松合食品 同じ理念をもって生きてきた	6
心がかぜをひくとき 子育て応援学習会 グリーンコープがめざす生活協同組合®	7
組合員・ワーカーズ・職員リレーメッセージ 未来へつなぐ20年 私の思い	8

20年の歴史を創った原点に戻る



グリーンコープ連合
林 みな子

日本の農業は江戸時代には水田を基礎とする複合農業という形が完成されていた。ところが1961年に制定された農業基本法は、農業を工業の論理で捉えるというもので、近代化（単作大規模化）、国際分業（農産物の自由化）は農村の風景を一変させていく。当然のことながら米を除いた穀物の自給率は下降の一途を辿った。

グリーンコープは農業の再生をめざして、1993年独自の農業政策を定めた。林みな子はグリーンコープ連合青果委員長としてその策定の先頭に立った。



私たちの社会は農業を基礎に

なりたつていている

林

は1947年千葉市で生まれ、その都会的な空気の中で育った。多感な青年期は70年安保へ向けて政治の季節の只中。静謐が漂う人だが、学生時代は「ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）」のデモに参加するなど林は自身の座標軸を持って時代と向きあい、矛盾なく自己の内に納めた。

大学卒業後すぐに結婚。海外で3年ほど過ごし、夫の赴任に伴い福岡県古賀の公務員宿舎に落ち着く。長女に続いて二女を身ごもっていた時、同じ団地の40代の主婦がただ一人、生活協同組合を立ちあげようと動きはじめ、林はこれに賛同する。翌1974年創立となるふくおか北部生活協同組合の話だ。林の生活協同組合とのかかわりはここからスタートする。

時代の熱波を受けて

当時、ほんものの牛乳、合成洗剤ではなくせっけん、安全な食べものを求める気運は全国的に盛り上がりを見せ、小さな生協が都市部を中心に生まれていた。そうした生協のほとんどが地域の拠点となる大学生協からの働きかけで立ちあげられ、男性が理事長になっていた。北部の場合そうではない。設立に奔走した主婦、木村房枝が初代理事長

となり、女性理事長ということで新聞にも取り上げられた。そのようなところに林は密かな誇りを持ち「北部魂」と呼ぶ。その独立歩の北部魂が生協活動における林の原点となった。出資金の5000円が当時としては高かったことをよく記憶している。

子どもの成長と共に身軽になり積極的に生協にかかわりはじめた。活動は、手

弁当のボランティア。が当たり前の世界。林は主に地

場の生産者グループからの野菜の買出し係を担当し

た。また、その他の生産者グループと交流し、援農に

も出かけた。当時は専業主婦の割合が高かったことも

あり、みかん狩り呼びかければたちどころに50人が

集まるといふ具合だった。生活協同組合の原則「出資

・利用・運営」が目に見える形で、半径1kmの円内で

完結できた時代だった。

北部生協は1982年4月、隣接する日の里生活協

同組合、いづか生活協同組合と合併し福岡県北生活

協同組合となり、「ちくれん」北ブロックの一員としてグリーンコープ連合結成

へと向かう。

食品公害が頻発した高度

経済成長期は、農業におい

ても取り返しのつかない道



米の産直について意見交換する青果委員会（1995年3月）

へ踏み出した時期でもあった。言うまでもなく1988年グリーンコープに結果した生活協同組合は、こうした農業の危機に対応してそれぞれ発足当初から独自に産地や生産者グループを抱え、活発に交流を続けていた。従って、グリーンコープ連合を結成して以降も、青果物はそれぞれの生産者との取り引きをそのまま受け継ぐ形になり、1995年10月からの地方化に合わせて青果販売カタログは8版も用意されていたほどだ。だが、グリーンコープという

ところを知るところから開始する。1991年7月のことだ。救いの主は当時担当常務だった兼重正次。兼重はグリーンコープエリアを超えて日本、アジアを視野に入れ、農業を含む自然環境の循環を構想していた。グリーンコープの食べもの運動の骨格はすでにカタチをみせていたと言える。林たちはそれを頼りに実際に広域に散らばる産地を精力的に視察してまわり交流を重ね、猛烈な学習の末、1993年「グリーンコープの農業政策」にそれらすべてを結実させた。画期的なことだった。「グリーンコープの農業政策」の第一項は「農業を評価する」からはじまり、いかなる文明も農業が衰亡したとき文明も衰亡した...と続く。

今も夢を紡ぐ

「当時の青果委員会の中で、意見はさまざまだったけれど、向いている方向は同じだったから内部では早くまとまった。むしろ生産者との葛藤が苦しかった。10年後も農業が継続できている」という生産地としての条件下では地場の生産者グループも適合しなくて...「でも思い出すと楽しいことはばかり。生産者に曲がったきゅうりでもいいですからと言ったら「きゅうりは土作りがしっかりできていれば生りはじめと生り終わりを除いて、大地に向かってまっすぐ伸びるんです！」って怒られたこともあったわ（笑）」。

現在の林は第一線から退き、高句麗の歴史に熱中する。一時期、夫と共に韓国に滞在した、その縁からか。

「アジア民衆福岡寄り合い」 単協分散交流会

組合員と出会って 楽しく交流!

11月8～9日に「アジア民衆福岡寄り合い国際会議」、11月11日にその報告集会が開催されました。そして、11月12日と13日には、フィリピン、インドネシア、パレスチナ、東ティモール、パキスタンなど海外からの参加者が、各単協で開催された分散交流会に参加し、多くの地域組合員と触れあう場を持ちました。

単協の組合員との交流のようすを報告します。



民衆交易のはじまりの話を、時折涙ぐみながら話すノルマさん



通訳をするのは、APLA現地駐在員の大橋成子さん



山間の棚田が世界遺産に登録されたことで観光化がすすんでいると話すラシガンさん

フィリピン バランゴンバナナがつくる連帯関係

ひょうこの交流会は、ネグロスATCのノルマ・ムガールさんと北部ルソンCORDEVのグレゴリオ・ラシガンさんを招いて行われた。会場となった尼崎市女性センタートレビエには約40人の組合員が参加した。

ノルマさんから語られる民衆交易の歴史はグリーンコープの20年そのもの。グリーンコープの愛すべき商品の一つでもあるバナナの誕生秘話に参加者は目を潤ませながら聞き入っていた。ラシガンさんはルソン島に生きる先住民アイゴロットであることを誇りに生きている。自分が生活する地域に鉱山開発や棚田など豊かな自然を目当てに海外の企業が入り込んでいく問題などが訴えられた。

※農村開発のための協同組合

インドネシア エコシュリンプのてんぷらで交歓

インドネシアからのゲストはおかやまを訪問。岡山ふれあいセンターで約25人の参加者と交流した。

ATINAのハリ・ユリスサントさんはエコシュリンプの伝統的粗糲養殖や加工工場など民衆交易のための整備されたシステムについて話した。また、マングローブ林などの環境保全の社会活動に地元の人々と共に積極的に取り組んでいることなどを説明。ATINAが支援するパプア農民発展財団から、自立に向けた民衆の思いがアピールされた。会場からは盛んに質問などが出されて交流を深めた。その後、エコシュリンプ料理をしながら昼食時の楽しいひとときを過ごした。

※オランダ・トレド・インドネシア



エビのてんぷらや手巻き寿司などを調理実習しながら交歓した。ハリーさん(左)



子どもたちと一緒に記念撮影!(右)

パレスチナ オリーブオイルが連帯を育む



UAWCから陶器のプレートをくまもとへプレゼント。右は久米田理事長



イスラエルによる占領のようすを伝えるヒドゥミさん

くまもとでは、パレスチナからUAWC(パレスチナ農業開発センター)代表のカーリド・ヒドゥミさんを迎え、約70人の組合員、ワーカーズのメンバーが会場のアクアドームくまもとに集い、交流会が開催された。

ヒドゥミさんから、パレスチナの人々にとってオリーブが生活の糧になっていること、生産者のようすや、イスラエルによるさまざまな抑圧について、映像を交え紹介があった。その現状を目にした組合員からはため息が漏れていた。できたてのオリーブオイルの試食に賑わい、続いて全員で熊本民謡「おもてやん」を踊り会場は笑いに包まれた。今回の交流をとおして、「アジア人同士心が通じ温かい気持ちになれた」とヒドゥミさんは語った。

東ティモール コロサエコーヒーは東ティモールの人々の生きる希望

さがでは2002年独立したばかりの新しい国、東ティモールの交流会が、佐賀県労働者福祉会館で行われた。ダニエル・ペレイラさんはコーヒーの栽培から生豆が出荷されるまでをていねいに説明。多くの人の手を介してコーヒーが届けられるようすを分かりやすく報告した。アンテロ・ベネディクト・ダシルバさんはインドネシア軍の空爆で逃げ回ったつらい体験を話し、「独立を果たし、今後自立のために人々が農業を営んで生活することが必要」と訴えた。また、現地の歌を会場全員で歌う楽しい場面もあった。最も新しい民衆交易品であるコロサエコーヒー。参加者は出されたコーヒーを深く味わって飲んだ。



参加者からのコーヒーについての質問に答えるダニエルさん(左)



「この次は東ティモールの若いコーヒー生産者が日本に来たらよいと思います」と今後の交流について話すアンテロさん

パキスタン ファイバーリサイクルの学習会と交流会



子どもたちが大切に使う短くなった鉛筆と傷だらけになるまで使ったビー玉

パキスタンから2人の訪問者を迎え、支援をしているJFSAの活動に関する学習会と交流会がやまぐちの周南市文化会館で行われ、約50人の組合員が参加した。

「私たちの学校はごみが集まるスラムにある。子どもたちの将来は、物乞いをするか強盗をするか、の選択しかない。無学でいることで被るリスクを避けさせたい」「みなさんがこうしてここにいます。それだけで私の心はいっぱい。私自身に力をくれる」とムザヒルさんは語った。古着を売った利益は学校の運営に使われる。「JFSAの取り組みを伝える」「古着を送る」という具体的な行動が支援となり、パキスタンの子どもたちの自立につながる。ファイバーリサイクルへの理解を深めた交流会となった。

※日本ファイバーリサイクル連帯協議会



長沼 浩美 理事長

今年の5月にグリーンコープ生協ひょうごは4歳になります。幼稚園に入る年齢になったでしょうか。自分でボタンをかけられるようになったけど、まちがえてかけてしまう年頃、それでも自分でやりたいの！
今年、活動にかかわれる組合員を増やして、より地域を意識した活動を実践していきたいと思えます。自分でやることを少しずつ増やして、いろいろなと思えます。できないことはない！自分に正直に前を向いて、すすんでいきます。

グリーンコープ生協ひょうご



中村 富美子 理事長

大阪にグリーンコープができて今年で94年になります。昨年は20周年記念行事が続き、またグリーンコープを知らない人たちにもアピールしていくことができました。
今年、新しく迎えた組合員も誘って組合員同士が出会える場をたくさんつくり、グリーンコープを大好きな仲間が増えていくような活動をしたと思っています。
グリーンコープの一員として、いろいろなことを吸収し、大きく羽ばたいていけるよう頑張ります。新米生協のおおさかを応援してください。

グリーンコープ生協おおさか

豊かな未来を創る

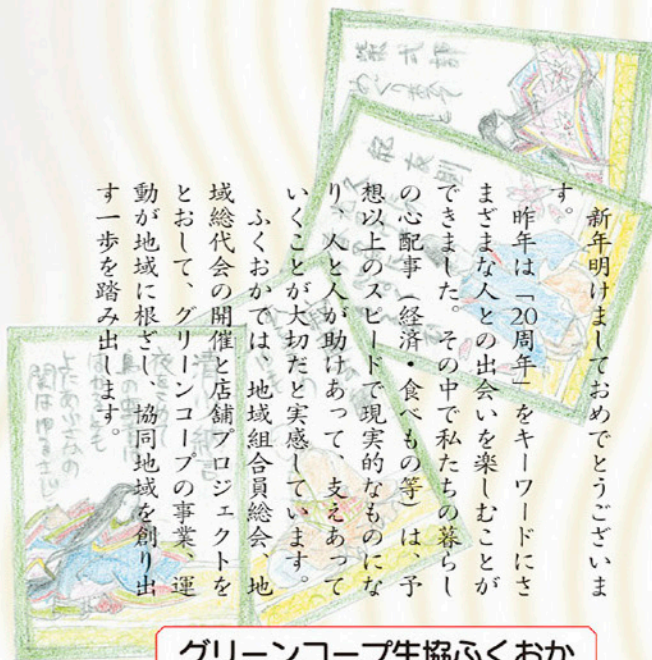
生活苦が人々を覆うと言われています。グリーンコープは未来を見据えてきました。そんな財産である「人」「モノ」「カネ」を築きました。また、民衆交易を軸に築き上げることができました。すすめていきます。



坂口 陽子 理事長

あけましておめでとうございます。2009年、グリーンコープ生協おokayamaは、設立7周年を迎えます。これまでおokayamaでは、グリーンコープの安心・安全な食べものを中心に取り組んできました。今年、グリーンコープの豊かな取り組みのなかの「1つ（地域福祉）」に関する検討もはじめます。困った時、誰かのやさしい手が差し伸べられるような地域が岡山の地に広がっていくことをめざします。今年も元気に、食べもののこと、そして地域福祉のことに取り組んでいきます！

グリーンコープ生協おokayama



新年明けましておめでとうございませう。昨年は「20周年」をキーワードにさまざまな人との出会いを楽しむことができました。その中で私たちの暮らしの心配事（経済・食・もの等）は、予想以上のスピードで現実的なものになり、人と人が助けあって、支えあっていくことが大切だと実感しています。ふくおかでは、地域組合員総会、地域総代会の開催と店舗プロジェクトをとおして、グリーンコープの事業、運動が地域に根ざし、協同地域を創り出す一歩を踏み出します。

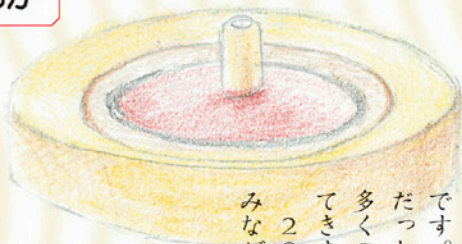
グリーンコープ生協ふくおか



田原 幸子 理事長

2009年、グリーンコープ生協さがは設立20年を迎えます。20周年を記念して、レセプションや子育て講演会などの企画を検討中です。組合員数も念願の1万人を超え、更なる仲間づくりをすすめていきたいと思えます。また、私たち自身が楽しく元気に活動することで、活動組合員を増やし、皆の力を結集して「組合員総会」の実現に頑張っていきたいと思えます。新しい年は、県内2会場で、組合員

グリーンコープ生協さが



明けましておめでとうございませう。くまもとで2009年から取り組む第一の課題としては、代理人ネットワーク運動です。私たちが「住んでる街を住みたい街に」。夏には八代市の二期目、秋には五名市の代理人のローテーションを実現させます。また、昨年よりリニューアルに取り組んだ食パンが4月頃に登場する予定です。現行の食パンは支持の高い商品だっただけに大変さもありましたが、多くの人と話し合いながら検討を重ねてきました。ご期待下さい。2009年もグリーンコープを楽しみながら伝えていきたいと思えます。

グリーンコープ生協くまもと



奥田 富美子 理事長



久米田 薫 理事長

「バキスタンの子どもたちはどんな新年を迎えているかなあ」。昨年11月国際会議の単協講演会でバキスタンの首都郊外でスラムの子どもたちのための学校「アルカイール・アカデミー」の話の伺い心が揺さぶられました。今年度、その支援の為にファイバーリサイクルに取り組みます。「自分で自分を助ける教育の必要性」を訴えていたムサヒル校長の顔が浮かびます。この春、組合員主権を貫く為の「地域組合員総会」も試行的に開催。地域の組合員との新たな出会いが楽しみです。

グリーンコープ生協おいた

新しい年を迎え今年も夢に向かって一歩一歩歩いていきたいと思っています。昨年、グリーンコープ連合設立20周年記念事業に組合員の方を結集し、発案したことは大きな財産となりました。積み重ねてきた財産を糧に課題となっている「地域福祉実現」へひとつひとつ歩みを進めていきたいと考えています。今年も「元気」で「いきいき」とした活動をおして、この鳥取の地にグリーンコープの輪を広げていきます。



上田 育恵 理事長

グリーンコープ生協とっとり

創立50余年の古い生協が数回の名称変更をし、グリーンコープ生協(島根)になったのが、2007年総代会でした。そして、昨年は商品交流会を3会場で開催し、今までにない皆さんの来場者で賑わうことができました。「グリーンコープは安全・安心」という信頼も定着し、少しずつ島根にグリーンコープが根付いていることを実感しています。若い理事や地区委員も増え、一人でも多くの人にグリーンコープを伝えたいと頑張っています。これからもますます輝く元気な(島根)になりたいと思っています。



角 幸恵 理事長

グリーンコープ生協(島根)

協同して、連帯 グリーンコープの

世界に蔓延する経済破綻によって、貧困とかなてから厳しい状況を視野に入れ、協同して、「共同体」の形成も確実にすすみ、みんみ一杯生かし、一つひとつ難題を乗り越えてきた「南と北の連帯」のさらなる深化を準備すグリーンコープは、2009年も凛として歩



林 和子 理事長

新年明けましておめでとうございます。相次ぐ食品偽装や景気後退など先行きの不安な世の中ですが、だからこそ私たちグリーンコープの果たす役割は大きいと思います。昨年福山に念願の支部を開設し、ひろしま一丸となって仲間づくりに取り組んでいます。お互いに支えあいながらすすめていく中で、「人と人とのつながり」の大切さを改めて感じているところなんです。また、グリーンコープの持つ可能性、大きなチカラも感じています。新年を迎え、心新たに組合員のみならずと共により一歩前進していきます。

グリーンコープ生協ひろしま



高橋 純子 理事長

2009年(長崎)は30周年を迎えます。(長崎)の現在までを創ってきた組合員みなさんに感謝し、そしてこれからの未来を共に歩んでいく組合員みなさんと一緒に30周年を祝い、記念となる企画を現在検討中です。また、今年度活発に取り組んできた、地域・地区での学習会や視察見学を引き続き取り組み、メーカーさんや生産者の方々と交流することでグリーンコープの商品の良さを直に知ってもらい、グリーンコープの仲間をもっとたくさん増やすことにつながっていききたいと思っています。

グリーンコープ生協(長崎)



田中 裕子 理事長

にグリーンコープ商品・メーカーに出会ってもらおう商品交流会でスタートします。

新年おめでとうございます。清々しく新年を迎えたいとお喜び申し上げます。さて、昨年理事長に就任したばかりの私にとって、一生懸命に走り続け、さまざまにみなさんに支えられたと実感した一年でした。今年も、かこしまが元気に活動できるように、そして心が風邪をひくことのないように余裕を持って何事にも取り組んでいきたいと思っています。みなさん応援してください。



川原 ひろみ 理事長

グリーンコープかごしま生協

昨年、グリーンコープ生協みやざきは設立10周年を迎え、食べもの運動から地域福祉まで、組合員活動も広がりました。人と人の繋がりがとても大切だと、理事長になって改めて感じています。いろんな方との出会い、繋がりを大切に今年も元気に活動していきたいと思っています。今年3月に綾町で「GMOフリーゾーン全国交流会」が開催されます。多くの方と綾町で出会うのを楽しみにしています。お待ちしております！



杉尾 紀美子 理事長

グリーンコープ生協みやざき

共に歩んだ20年



松合食品



同じ理念をもつて生きてきた

グリーンコープはこれまで、関係する多くのメーカー・生産者との信頼関係をベースに食べものの安心・安全を確立させてきました。設立から20年、あるいは設立以前から、共に歩んできたメーカー・生産者をとおして見えるグリーンコープを紹介します。

健康や食べものに強い関心とこだわりを持ちながら、味噌や醤油などを作ってきた松合食品(株)。波穏やかな不知火の海が眼前に広がる高台の社屋で、社長の松浦茂さんと工場長の橋本順子さんに、お話を聞きました。



社長の松浦茂さんと工場長の橋本順子さん
不知火海を背景に

地元へ愛されている
老舗として

松合食品は、熊本県不知火町松合の地で、阿波屋という屋号で味噌や醤油の醸造をはじめ181年。先代の社長が松合食品と社名を改め、戦中戦後の荒廃から地元の応援を受けながら再起をはかった。

こだわりに生きる

松浦さんの数代前の親族には、玄米菜食を広めるために全国行脚をした医者もおり、代々健康と食べものに強い関心をもつてきた。先代の社長も現社長の松浦さんも有機農業研究会に参加、農業にも造詣が深く、医食同源の実践者だ。

松合食品もまた、地元の朝市へ出店したり、本社前で月に一回みそ汁の日を設け、地元の魚介や自社で育てた野菜などを入れたみそ汁を地域の人や訪れる人に食べてもらっている。水害時には、松浦さんの英断で水に困っていた町の人たちに即刻、水を届けた。そうしたことのひとつひとつから、老舗として地域を愛し、地域に親しまれている姿がうかがえる。

出会うべくして出会い
グリーンコープと
共に歩む

30年前、先代が社長の頃、グリーンコープ生協くまもととの前身生協の山内専務が声をかけ、取り引きがはじまった。当時、添加物などが問題になる中で真摯なものづくりに取り組んでいる松合食品の商品は、ほんのりを求めていた生協にとつてぜひ欲しいものだったのだ。その後グリーンコー



グリーンコープで取り扱っている松合食品の商品

互いに学びあい

プに移行する中で、九州人好みの甘口仕上げのための工夫など、先代の社長と橋本さんが何回もグリーンコープ連合に足を運び、話し合いを行った。そうしたものの作りの結晶として、グリーンコープの商品がある。

グリーンコープのみそは、大豆・米・小麦など原料のすべてが国産、食塩は天日塩。醤油は、丸大豆(non-GMO)・国産小麦・天日塩、種こうじを使い、じっくり仕込む醸造だ。現在使用しているカナダ産丸大豆(non-GMO)を国産に切り換えるというグリーンコープの今後の方針は、国産にこだわりをもつ松合食品にとっては願ってもないことだ。

これからの時代を

「夢は阿蘇に自社農園を持つこと。希望する誰もがかわれる農園を持って、取れたものを素材として生かしたり、そこで調理して食べてもらったり」と松浦さん。「コツコツと地道にですね。これまで同様、実直に努力を重ねながらですね。次世代に松合食品のこだわりを伝えたい」と橋本さん。

受けることもあり、姿勢を正すこともできました」。

女性の感性を生かして

松合食品は、食べもの作りには、家族のために栄養価や味を考えながら日頃料理をしている女性の方が向いていると考えている。従業員は、趣が入っている時には、夜半も麴の状況に気を配り見守る。「傾合をみる感覚、色・味・香りに対する細やかな女性の感性が、うちの商品には生きています」。橋本さんは、先代の社長時代から工場長をしている。「大切なのは食にこだわりを持つこと。もちろん、リフトやトラックにも乗り、どんな仕事でもこなします。むしろ女性にとつて厳しい側面もある職場だと思えます」とつとつとした口調の中に、重責を担ってきた自信が感じられる。

清廉な企業として、生き生きと事業をしている松合食品は、この20年を、そしてこれからのグリーンコープの商品の、安心と安全を支える力強いパートナーだ。



心がかぜをひくとき

子育て応援学習会 グリーンコープ共同体福祉委員会

いじめや引きこもり、不登校の増加に表れているように、今の社会は子どもが生きにくく、親も不安と悩みを抱えながら子育てをしています。

11月20日、福岡市で子育て応援学習会が開かれ、組合員107人が参加しました。講師は臨床心理士でスクールカウンセラーなどで活躍している吉村春生さん。子どもの年齢を問わず、すべての子育て中の母親に向けた話がありました。講演要旨を紹介します。

「心がかぜをひくとき」とは、安心感が低下したときです。

子どもを飛行機に例えてみましょう。生まれると陸して人生をスタートします。乳幼児期、児童期と水平飛行し、思春期・青年期で機首を上げて一気に上昇する、これが「自立」です。ところが、機首を上げてエネルギー不足で上昇できず、低空飛行を続ける子が最近たくさんいます。子どもは「飛べる」と思っているのに飛べない、親も「飛べるはず」と思っています。そこに友人関係や学習のつまづきという落雷が飛行機に落ちて墜落、飛行機が壊れて格納庫に入っています。これが「引きこもり」です。小中高で何とか飛んでいても、大学で墜落（不登校）する子も多いですね。そこに必要なものは「安心感」というエネルギーなのです。

人間は感情の生き物と言われます。特に負の感情（不安、怒り、悲しみ、つらさなど）には弱く、忘れようとしてその感情を無意識の世界に送り込みます。ここが負の感情でいっぱいになると思考や行動が固まって動かなくなり、不安感が強くなります。これは日常生活に支障をきたしてしまいます。この不安感を安心感に転換させる必要があります。そのため大切なのが「甘えさせる」ということです。「甘えさせる」と「甘やかす」は違います。育児を思い出しして下さい。おっぱいやミルクをあげ、一緒に眠り、オムツを替える。スキンシップをしながら赤ちゃんの快・不快をすべて受け止めていました。同じように受け止めて聴いてあげてください。

「甘えさせる」とは聴き上手になることです。これが安心感の蓄積にもなります。そして、子どもの飛行機を安心して満タンにして飛び立たせてください。乳幼児期に安心感の蓄積を十分できるとよいでしょうが、高校生だから遅いということはありません。いつでも引き返せます。「かせ」を引いているのだから休憩もいいてすね。具体的には学校がきつかったら休む。塾もやめさせる。その際必ず「お母さんがあなたと一緒にいたいから」と言葉を添えてください。そして子どものそばに居る、母親は子どもの安全基地なのです。人が安心感を感じるのは相手が笑顔の時です。子どもには母親の笑顔が必要なのです。ただ、お母さんにも心の空き容量がないと笑顔は出ません。そのためにも母親が守られ安心できることがとても必要です。この役目は父親です。「男の子育て」とは「その子の母親を守る」と私は思っています。



講師 吉村 春生さん

西九州大学非常勤講師、臨床心理士。小学校教員を経て、佐賀県の公立小中高校・佐賀大学、一般企業で父親向けの講演活動など幅広い活動を行っている。

子どもは自分の足で自分の人生を歩かないといけません。大切なのは親が亡くなった後、辛いこと悲しいことがあっても、父や母の姿が「大丈夫だよ」と笑顔と共にまぶたに浮かび、安心できることです。そんな子どもはどんなに辛くても死を選びません。生きていきなさい。そのために親は生きていく間にいっぱい安心感というエネルギーを貯めてあげてください。安心感がある人が生きていくための土台なのです。



グリーンコープがめざす

生活協同組合



グリーンコープのあゆみ (地域福祉の展開)

1993年、理事長会が中心になって中期計画基本構想「夢ヲかたち」を策定しました。「教育・文化」「地域福祉」「環境・農業」をテーマとした中期の目標を定めたのです。組合員自身が自分たちの言葉で起草しました。この「夢ヲかたち」に沿って、グリーンコープの歩みをすすめることになりました。

1994年、福祉政策を策定、それに基づき、グリーンコープ福祉連帯基金が設立（2004年発展的解散）。さまざまある福祉の課題の中で当時の最も大きな問題が高齢者福祉でした。そのために、在宅福祉・介護用品事業・情報サービスの三本柱をスタートさせました。在宅支援の担い手には、たすけあいワーカーズが、次々に立ち上がりました。

源の一つが、「福祉活動組合員基金（100円基金）」です。組合員一人ひとりが100円を拠出、ワーカーズなど地域福祉を担う団体などへの支援の財源としました。「なぜ福祉なのか」。単協では、総代会などで大論争となりました。しかし、そのことが組合員自身の福祉への理解と主体性につながりました。また、たすけあいワーカーズの誕生を契機に、店舗や宅配など多種多様なワーカーズが誕生していききました。

グリーンコープの地域福祉は、介護保険事業へ参入、社会福祉法人グリーンコープの設立など着実に歩みを進め、「子育て応援」「ホームレス者の自立支援」「生活再生事業」へと繋がりに、「共生」の理念は、地域に着実に広がっています。

投稿募集中

- グリーンコープ誕生20年よせて
- 私の好きなグリーンコープ商品

●400字程度 ●メー 毎月末
●住所・氏名・年齢・TEL・所属生協名を明記して郵送またはFAX、Eメールでお送りください。掲載分には図書カード(500円分)進呈。
●住所・氏名などの組合員の個人情報、本紙に掲載の場合のみ使用します。

〒812-8561
福岡市博多区博多駅中央街8-36 博多ビル7F
グリーンコープコミュニケーションワーカーズ連(REN)
「共生の時代」編集部 宛
FAX 092-481-7876
Eメールアドレス rikoho@greencoop.or.jp

募集 「ストップ再処理」車両用マグネットシートのデザイン募集!

六ヶ所再処理工場反対をあなたのデザインでアピールしませんか

募集要項

- ・色：カラー ・直径15cmの円形
- ・枠内に入れる文字
メインコピー：「ストップ再処理 海に空に放射能を捨てないで！」
サブコピー：「六ヶ所再処理工場」に反対し放射能汚染を阻止する全国ネットワーク（小さい文字で）

以上を紙またはデータ（PDF添付）にして、下記宛に郵送またはE-mailでお届けください。

- ・住所、氏名、電話番号、生協名・支部名を明記してください。
- ・採用作品には、阻止ネット各呼びかけ団体の産直品、あわせて3万円相当をプレゼントします。
- ・締切 2009年1月31日必着

◆選考は阻止ネット事務局会議で行います。お届けいただいた作品は一部修正することがあります。採用された作品の著作権は阻止ネットに帰属します。作品は返却しません。

送り先

〒812-8561 福岡市博多区博多駅中央街8-36博多ビル4F
グリーンコープ共同体 本部組合員事務局 理事会グループ
TEL 092-481-5576 FAX 092-481-2769
E-mail : vawele0@greencoop.or.jp

募集 2009年 シャボン玉月間ポスター

【募集要項】

- でき上がり寸法：B3(横36cm縦51cm)
- 色など：カラー(紙、データ(PDF添付))
- 必ず入れる文字：(2009年キャッチコピー)
「昔からずっと これからもずっと やさしいせっけん」
- 内容：「石けんを使う暮らしの提案」、「水環境保全についての提案」など
- 締切り：2009年1月31日(必着)
(メールまたは郵送で)
- 採用作品決定：2009年2月
- 賞金：3万円(採用作品のみ)

※住所、氏名、電話番号、加入生協名を明記する

(作品の送り先・問い合わせ先)

〒261-0011 千葉市美浜区真砂5-21-12
生活クラブ生協(千葉)内 協同組合石けん運動連絡会・事務局
TEL 043-278-7172 FAX 043-279-7490
E-mail masanori.kurakata@sclub.coop

2008年11月の組合員数 405042人 (11/25現在)

※リユースリサイクルデータ、放射能汚染測定結果は次号掲載します。

グリーンコープ

未来へつなぐ20年 私の思い



グリーンコープの20年という歴史の中を、多くの人、多くのコトが駆け抜けていきました。その一つひとつがグリーンコープの中に刻まれ、グリーンコープの成熟へとつながってきています。この一年間、さまざまな人をおしてグリーンコープの歴史をひもといていきます。

グリーンコープ誕生20周年を記念して、組合員・ワーカーズ・職員からのリレーメッセージを掲載します。



グリーンコープ生協ふくおか元副理事長
生活再生相談室相談員 (久留米相談室) 一丸 直子

グリーンコープに関わりはじめたのは、グリーンコープ連合設立間もない頃からです。初めは現在の「グリーンコープ生協ふくおか」に合流前の、「グリーンコープ生協ちくご」の前身生協のひとつである県南生協の地区運営委員としてでした。商品と活動と、関わっている人が好きという理由から、だんだん入り込みましたが、まさかこれ程までに長い関わりになるとは、まったく思ってもいませんでした。

20年前は、古き良き時代とでもいうような雰囲気がありました。大きな違いは組合員事務局組織がなかったことです。当時の理事(地区運営委員長とでも言うべき人)は、地区運営委員会や、取り組みの前には、必ず委員に電話をされていた。幼稚園の役員を最優先していた私は、結構断っていました。いつ

グリーンコープが好き！そんな思いを抱き続けて

も気持ちよく「じゃあ、こんどね」と言ってもらっていました。だから、次の年、委員をちゃんとやろうと思えました。そのことは、ずっと心において活動してきました。組合員は仕事ではなく、自分の中でグリーンコープとのつながりを確かめながら活動している、だからひたむきに関われるのだと。そんなこんなで「理事にならないう？」と声をかけてもらいました。以来「グリーンコープが好き」と思いながら、20年近く組合員活動が続けることができ、昨年3月卒業できたことを本当に感謝しています。

組合員の中で、心から「グリーンコープが好き」と思っている人の何と多いことか。多分「自分が一番」と思っている人も多いのでは。これから先も、そういう組合員がたくさん続いてほしいと願っています。人がグリーンコープを豊かにして、一人ひとりが自分の中のグリーンコープを豊かにしていくのでしよう。私もそのひとりでありたいと思っています。

今、私は福祉用品店舗「生活サポート&ケアショップ自由自在みずまき店」にワーカーとして働いています。お店の外には「グリーンコープ くらし」こだわって「20年」と書かれたのぼり旗が元氣よく風にはためいています。

生協とのかかわりは、ほくちく生協(現グリーンコープ生協ふくおか)の地区委員からはじまり、職員の食に対する熱い思いに触発されながら、また組合員活動の先輩方に学びながら、気が付くともう30年近くになっっています。

この間、「考えるより先に動く」ことが得意な私は、本当にたくさんの組合員さんと出会い支えられながら活動してきました。その中でも「福祉活動組合員基金(100円基金)」の取り組みは、とても貴重な体験でした。一人ひとりの組合員と向きあい、これからのグリーンコープの未来を、福祉の未来を伝え、語りあいました。とても大変なことでしたが、このことをとおして、グリーンコープは組合員一人ひとりをほんとうに大切に、信頼できる組織だということを確認すると共に、グリーンコープの奥深さを実感しました。このことが、たくさんさんの「ひと(マンパワー)」を育て、福祉の基礎をつくりあげていったのではと思います。

福祉の基礎は一人ひとりを大切にすること



生活サポート&ケアショップ自由自在(みずまき店)
ワーカーズ・コレクティブ「凜」代表 河野 敏子

買さんと出会い支えられながら活動してきました。その中でも「福祉活動組合員基金(100円基金)」の取り組みは、とても貴重な体験でした。一人ひとりの組合員と向きあい、これからのグリーンコープの未来を、福祉の未来を伝え、語りあいました。とても大変なことでしたが、このことをとおして、グリーンコープは組合員一人ひとりをほんとうに大切に、信頼できる組織だということを確認すると共に、グリーンコープの奥深さを実感しました。このことが、たくさんさんの「ひと(マンパワー)」を育て、福祉の基礎をつくりあげていったのではと思います。

でも何と云っても「夢がかたに」していった先輩方のエネルギーにはただただ脱帽です。

グリーンコープには、軽やかに飛び越えていく「ひと」をたくさん生み育んできた「底力」を感じます。これからは「ひと」を育んでいくことを確信できます。そして今、私は「モノ」を通して福祉にかかわっています。「グリーンコープがあつてよかった」と言ってくたさる方々の笑顔が私たちの勲章です。

だから今も、そしてこれからも「毎日グリーンコープ」です。



自立・連帯、共助で地域に根ざす

グリーンコープ生協(島根) 専務理事 寺本 敏徳

1989年1月、地域生協として共同購入事業の活動がはじまった頃は、宍道湖・中海を汽水湖から淡水化して一部を干拓し、農業用水にするという県民の最大の関心事があった時代でした。当時はせつけん運動も盛んで、出雲市、松江市、浜田市に準備会が次々に発足し、せつけん派生協として県下に広がっています。現在に至っています。

(島根)の前身生協の設立は52年前。戦後の混乱期を乗り越えて今があります。かつては出雲市内で小さな店舗事業と自動車整備工場、県の集合庁舎内の売店も運営していました。

グリーンコープとの出会いは、1990年頃。当時はグリーンコープの会員生協ではありませんでした。グリーンコープ連合のエリアではなかったため、利用契約を締結していません。その後、鳥取県の生協クロウヴァ(現グリーンコープ生協とつり)との事業連帯や、組織再編などを実施しました。それと同時に鳥根県中部生活協同組合、

ばに出会い、組合員の運営への参画と、自立、連帯、島根としての主体形成や人と人との関係など、多くの人との出会いがあつて、今に活かされ、今を生きていると実感しています。

グリーンコープ共同体が結成され、グリーンコープ運動を自信と確信を持って島根の地で実践していく時代がきたと思っています。不十分さを抱えながらですが、一歩ずつ確実に、島根の地をフィールドに共同購入事業設立の原点でもある「顔の見える関係」「ふれあい」を大切に、グリーンコープの組合員の暮らし地域が広がる地域でグリーンコープらしい人と人との関係、「共生」「共助」をキーワードに歩んでいきます。